

小田切秀雄編
淺田光輝

近代日本斷面史



青木新書

近代日本の学生像

小田切秀雄

学生という階層がうまれてから一世紀、近代文学にあらわれた青春像を通して学生思想と生活の問題を解明した力作一〇〇円

インド兵(セポイ)の反乱

鈴木正四著

明治維新、太平天国の乱とならんでアジアにおける三大民族解放闘争といわれる反英インド土民兵の蜂起を描く貴重書一〇〇円

近代日本断面史

小田切秀雄
浅田光輝

明治維新から太平洋戦争までの近代史をそれぞれの重要な時期に照明をあててもっとも典型的なテーマを追及した異色編一〇〇円

青木新書

社会主義入門

野々村一雄

社会主義に対する関心が今日ほど重要な時代はない。現代人の疑問にこたえて体系的な理論と各国の具体例とにより解明(近刊)

史的唯物論—社会発展史

艾思奇
玉嶋信義訳

人間社会のあゆみを正しく理解して、新しい世界観を樹立するためのもっとも演進的な入門・史的唯物論のテキスト! 一五〇円

国境の海

杉浦明平著

北の国境—オホーツク海をゆく。桂嶺、独航船にのりくみ、さいはての漁村と漁民を訪れた著者の生々しい現地の記事! 一二〇円

教祖—庶民の神々

乾・小口
佐木・松島

世相の谷間にあやかしの光をはなつ新興宗教の教祖列伝—天理教・大本教・生長の家・メシヤ教等のなりたちと実体(近刊)

すべてを党に

呉運鐸
竹内実訳

中国の「鋼鉄はいかに鍛えられたか」といわれるベストセラー。炭坑労働者が三度傷つきつつ再起する感動の自伝小説(近刊)

現代のフランス文学

渡辺淳著

社会主義リアリズムと実存主義を中心に現代フランス文学の当面する問題を解明。国民作家委員会の規約、綱領を付す(近刊)

戦後の民衆運動

竹内好編

社会科学、農民、教育、労働、科学、文学の各分野にわたる戦後日本の民主主義的運動を、歴史的に再検討した労作(近刊)

弁証法的唯物論

アレクサンドロフ
古在・森訳

経済学や歴史を学ぶものが先ずその方法論的基礎として把握せねばならぬ世界観の九めめの最新の哲学教程 全三冊完結 各一・二〇〇円

経済学教科書講義

宮川 実著

中央労働学校での講義に学習者の疑問をとりいれ、日本の現状に適用して書改め九訂本主義経済の逐条解説書 全四冊 各一・〇〇〇円

新科書 経済学教義 社会主義経済学

木ソ 研 編

社会主義への関心が今日ほど深く強い時はない離れながらも抱く疑問に答えて、土台である経済制度を中心にとく入門書 A近刊V

青経 済学 の 独 習

豊田四郎著

経済学をはじめて学ぶ人、集団学習と独習・独習のし方・本のよみ方・ノートのとおり方・経済学教科書学習要点を説明 一・二〇〇円

日本資本主義発達史

守屋典郎著

明治維新から第二次大戦後におよぶ日本資本主義の成立と発展を解剖した唯一の歴史として好評の旧著を全面的増補改訂 一八〇〇円

社会主義者の責任

ヒューバート・ラム
雪山慶正訳

赤狩りと反共ヒステリーのただ中でアメリカ独占資本に挑戦する社会主義者の良心と責任を吐露するヒューバート・ラムの好著 一・三〇〇円

社会主義の国の自由

イワノフ
川内唯彦訳

ソヴェト市民の生活の基本的権利と義務はどう守られているか「労働・教育・言論の自由」と目撃の義務を具体的にとく 一・〇〇〇円

社会主義の国の母と子

コベリヤンスカヤ
内海周平訳

あまり知られていない社会主義国の家庭の実体を、法律の具体的な適用の面——結婚・夫婦・出産・育児のコースで説明 一・〇〇〇円

チャンピオンの誕生

ダイレジーエフ
内海周平訳

レスリング・スケート陸上競技をはじめソヴェトのスポーツ名選手が職業からみいだされて鍛えられてゆく興味深い物語 一・二〇〇円

青き河の国

マニヤン
柁木恭介訳

フランスの若きジャーナリストが津車やジャンクの群にとけこんでとらえた青き河の国——新中国ルボ！ 上二〇〇円、下一四〇円

日本の思想

大井 正著

西歐思想が流れこんだ明治以降の日本思想の各分野に著しい影響を与えた主要思想家の思想を分析した日本思想史 一〇〇〇円

若き精神の成長のために

宮本百合子

變になやみ死をおそれる若き魂の成長をねがって、百合子が書き遺した女性の生活と文學に關する知性と情熱の人生論 一〇〇円

プロレタリア文學風土記

山田清三郎

多喜二の投獄時代をはじめ多くの秘話をちりばめて書場作家百余人の風い出話を描き出す興味津々のプロ文學側面史 一〇〇円

資本主義とは何か

ロチヌスタ
立井海洋訳

資本主義の成立から発展・衰滅への理論的説明を、主としてアメリカの現状にあてはめて最も平易に説く資本主義入門 九〇〇円

短歌と俳句

渡辺順三著
栗林農夫著

短歌と俳句はなぜ人生に必要かとその作り方をとよかす異色の入門書 一〇〇〇円

弁証法入門

山崎 謙著

生きるための哲学としての弁証法の新段階を、日常生活にむすびつけてじっくりと説いた明日を切りひらく人生読本 一三〇〇円

はたらく女性

ロチヌスタ
立井海洋訳

職場で家婦で婦人はどんな状態にあるか、婦人はいかに進まねばならぬか、ロチヌスタの女史による働くものの婦人論 一〇〇円

創造者たちの仕事

グラツサ
伊藤新一訳

マルクス主義の諸先達マルクス・エンゲルス・レーニン・スターリンの研究法、仕事スタイルを興味深く追及する 一〇〇円

未来をつくりだす原子力

林 克也著

原子力の原理と効力を現代人の常識科学として説明し、原子爆の利用による「死の穢威か 幸福の創造か」を対決す 一八〇円

わが文学論

江口 渙著

「わが文学半生記」の著者が、明治、大正昭和にわたる文学生活の中からつかんだ滋味あふれる非文壇的文学論 一二〇〇円

小田切秀雄 編
淺田光輝

近代日本斷面史

青木書店

37



はじめに

すべての歴史は現代の必要によって書かれる。このことは、何も歴史叙述の客観性を否定するものではない。かえって、歴史の真実の構造と意味は、歴史の結果として現われているこの現在を根本的に打開しようとする者によって最も深く照らされざるをえないということだ。

現代の社会生活の新しい段階への発展とわたしたちが直面するようになった新しいさまざまな困難な問題は、近代日本の歴史そのものについての一歩進んだ新しい解明を要求している。そしてそれは、あまりにも大きな労力と協力を要する課題であり、局面も実に広い領域にわたっている。それを一挙に実現することはさしあたり不可能である。そこで、日本読書新聞社が、この課題をめぐって各断面からの新しい照明を集めて次々と紙上に発表するから、執筆や文化・文学面での計画に協力せよといわれたとき、わたしはよろこんで賛成した。いまそれが一冊になって出るのは意義のあることだし、個人的にもうれしい。本書におさめられた各論文は、わたし自身のをべつにしていえば、それぞれの局面から新しい問題意識をもって日本近代の歴史を断面から

鋭く照しだし、または新しい問題を歴史的な基礎とのかかわりで提起している。これらは、樹木の切り口に現われた年輪の数と形がその樹木の長い生命と生活の歴史を物語るように、日本近代の社会生活と精神の歴史とそのひそめている意味とをその切り口から物語っている。そういうものとして生かして使うことのできる本だとわたしは信じている。

この本は日本読書新聞社、とくにその編集部の諸氏の編の名で出ることがふさわしい思ったが、つごうでわたしと、政治・経済面の計画に協力した浅田光輝との共編ということになった。内容そのものが意味がある本だと思うので、わたしはこだわらずに編者として名をかかげることにした。

一九五五年一〇月

小田切秀雄

目次

はじめに	小田切秀雄	三
近代日本の歴史	浅田光輝	七
自由民権と民主主義	浅田光輝	一六
明治文学の人民的動向	小田切秀雄	二七
明治二十年代の民衆運動	浅田光輝	三〇
国民主義と国権主義	岩井忠熊	三三
大正デモクラシー	竹内良知	三三
米騒動と労働運動の再興	小山弘健	三五
大正文学の位置	窪川鶴次郎	六〇
いわゆる「昭和維新」	藤原弘達	一〇一

プロレタリア文学	小田切秀雄	二四
自由主義の敗北	竹内良知	二六
生活綴方の運動	国分一太郎	二九
戦争と労働運動の退潮	小山弘健	三三
戦争と社会科学の転回	浅田光輝	三七

近代日本の歴史

近代日本社会の生成と発展

明治維新（一八六八年）から太平洋戦争の敗北（一九四五年）にまで至るおよそ八十年の日本の歴史は、基本的には、天皇制とその抑圧下の民衆との対抗の歴史として書かれなければならない。このほぼ一世紀にも近い歳月の経過のうちに、日本の社会はめまぐるしく大きく変化してきた。明治維新によって、資本主義的近代社会の形成へ一歩足をふみ出した日本の社会は、日清戦争（一八九四―五年）を終えた明治二十年代末にはすでに産業資本主義を確立して資本主義体制を完成し、それから十年後の日露戦争（一九〇四―五年）を終えた明治三十年代末には早くも独占資本主義の形成へ進み出て世界帝国主義体制の一環につらなるまでに至った。この独占資本主義体制は、それより十年を経て、大正年代のはじめ第一次大戦（一九一五―一八年）当時にはほぼ完全な形態に完成・確立され、それによって、三流の後進帝国主義だった日本は、ここに世界の最強帝国主義に伍しておしもおされもせぬ一流帝国主義たる地歩を占めるようになった。その間わずか五

十年、この近代日本の歴史の歩みはまことに急速であり、それにともなう日本の社会の変貌はおどろくべくはげしきものといわなければならぬ。しかも日本資本主義のこの独占体制確立の時期（一九一八年）は、あたかも第一次大戦とともに社会主義ロシアが成立し、それが世界市場から離脱してゆくことによって、資本主義世界市場が全般的危機の体制へ傾斜しはじめた時期（一九一七年）にかさなり合っていた。日本帝国主義は、この全般的危機の深刻化してゆくなかで、先進帝国主義の圧力と植民地民族の抵抗とにぶつかりながら、世界市場におけるその地位を確保し、またそのために不断に世界市場への飛躍的進出を企図しなければならなかった。このようにして、それ以後、昭和五年（一九三〇年）の破局的な大恐慌に至る十数年は、日本帝国主義が世界市場におけるこれらの圧力と抵抗に押されながら、独占資本主義体制をいわば内攻的に成熟し、そのことによって日本資本主義に内在する諸矛盾をギリギリにまで深めていった時期となるのである。この矛盾は堆積されて日本の社会体制の危機をもたらし、それは同時にこのような社会体制を強力に維持せんとする国家権力機構そのものの致命的な危機に集約されずにはいない。この危機を、国家権力それ自体の手で、上から積極的に切りぬけようとすることで、日本帝国主義は、戦争と軍閥独裁に血ぬられた最後の歴史へ突入してゆく。それは大恐慌のあれくるうさなかに爆発された満州事変（一九三一年）にはじまり、それ以後、中日戦争開始（一九三七年）までの六年の準備体

制期をふくんで、中日戦争の太平洋戦争への拡大（一九四一年）とその壊滅的な終局（一九四五年）へつき進む十五カ年にわたって展開される。

日本の社会の、この変転きわまりない発展の全過程をつらぬく基本的な方向は、いうまでもなく資本主義の形成・発展という方向である。この進化発展の歴史的方向に沿って、天皇制の機構も、それと対抗的地歩を占める「民衆」の階級的構成も不断に変化し発展してきていることはいうまでもない。

天皇制と「民衆」の変化

明治維新とともにその集権官僚制をふるめかしい宮廷官僚専制の太政官制度の形で出発させた天皇制は、その当初、だれの眼にも明らかかな天皇制藩閥官僚の専制支配体制の形態をなしていたが、資本主義的国内市場の統一と発展とともに、それは漸次「近代化」されていった。すなわち明治十八年（一八八五年）には太政官を廃して近代的行政制度たる内閣制を採用し、やがて明治二十二年（一八八九年）には欽定帝国憲法の発布とともに国会を開設し、形式的には立憲政体がおこなわれることとなった。しかも日清戦争のち、産業資本主義確立・昂揚の時勢を背景に、明治三十一年（一八九八年）には、わずか四ヶ月の短命に終わったとはいえ、官僚内閣に代ってはじめてのブルジョア・地主・政党内閣（憲政党・大隈||板垣内閣）が出現した。やがて独占資本主義確立の大

正七年（一九一八年）に至れば、憲政擁護の大衆的昂揚を背景に、独占ブルジョア政党の原政友会内閣が成立し、ここにはじめて官僚の介入を排した純粹な政党内閣を実現した。それ以後、大正十一年（一九二二年）から十三年（一九二四年）の二代にわたる官僚超然内閣時代をあいだにさしはさんだが、昭和七年（一九三二年）の犬養首相暗殺に至るまで政党内閣時代がつづいているのである。その間、大正十四年（一九二五年）には、国会における政党の力によって普通選挙法も成立実施されている。このように、立憲制度の強化と政党内閣実現に表現された天皇制国家機構の変化は、たしかに資本主義の発展にもなって絶対主義的君主専制の形態がよりブルジョア的となり、君主制的国家機構の内部にブルジョアジーの社会的発言力の強化が反映されてゆくことを示すものであろう。

同じように、このような国家機構に対抗する「民衆」の階級構成も、資本主義形成・発展にともない、国家機構の形態変化に対応しつついちじるしくかわってゆく。絶対君主制成立当時の藩閥官僚専制Ⅱ太政官制度に対抗する自由民権時代の「民衆」は、農民を原動力Ⅱ底辺とし、原生的ブルジョアジーたる地方有産者階層を指導的勢力とする古典的ブルジョア民主主義革命時代の民衆であった。やがて資本主義的国内市場の急速な形成と、絶対君主制による国家的統一の完成・その集権的国家機構の体制確立の明治二十二年までの過程において、この古典的民主革命は挫折し、

いまだ変革し終えなかつた封建的支配の圧迫下に農民の革命的エネルギーを内に深く潜在させたまま、ブルジョア地主的有産者層は国家権力に対抗する「民衆」的要素から昇化して、逆に国家権力と結合する社会的経済的な支配勢力へ転成していった。明治三十年代の産業資本主義体制完了・発展の時代とともに、ようやく近代的労働者階級の登場とその組織的運動が胎動しはじめる。それはいまや資本主義の発展のあらたな条件のもとで、かつて資本主義確立以前の古典的民主革命において原生的ブルジョアジーのになつた指導的役割と地位につくことを歴史的任務とされるようになる。「民衆」の階級的内容は、ここでまったく一変するのである。しかも資本主義の発展とその後につづく独占体制への転化の過程は、それによってたんに国家権力との対抗におけるプロレタリアートの組織的結合を強化する条件をつくり出すことを意味するのみではない。それは同時に、農村における資本主義の侵入をもたらし、農民層の広汎な分解を結果し、封建的圧迫下の農民にたいしてさらに資本主義的圧迫を加重することにより、労働者と農民との緊密な同盟のための現実の条件をひろくつくり出してゆくことを意味したのである。

絶対君主制の本質の貫徹と民衆の立場

だが資本主義の発展にとまなうこのような天皇制の体制変化と、それに対応する被支配「民衆」の階級的内容の変化は、そのまま絶対君主制としての天皇制の権力的本質の変化を意味し、同時

にそれによって「民衆」の国家変革目標の内容が転化したことを意味するのであろうか。そう考へることはできない。

官僚專制的太政官制の廃止と内閣制の採用・欽定憲法による立憲制の樹立は、そのことによつて君主制官僚の專制支配体制が終焉したことを意味したのではなく、依然、立憲制の外形によそおわれて天皇の官僚の露骨な專制支配がつづけられたのである。内閣は官僚によつて構成され、国会は大権発動によつて沈黙せしめられる形式的なものでしかなかった。本来、欽定憲法それ自身、何らブルジョアの立憲主義を内容とするものではなく、天皇の專制大権をすべてに超越せしめるいわば「絶対主義憲法」ともいふべきものであり、内閣制や国会制度はこの絶対君主的本質を粉飾する形式にすぎなかつたのである。むしろ明治二十二年の立憲制の採用は、天皇制絶対主義にとつて、資本主義の形成発展の条件において、下からの民主革命を制圧しつつ、上から国家的統一を完成し、中央集権国家機構を確立するために必要な一形式・手段であつたのにすぎない。したがつてこれは絶対君主制のブルジョア的變質を意味するものではなく、かえつて絶対君主制がブルジョアの進化に自からを適應せしめることによつて、その中央集権的国家統一を完成したものであることを意味するにほかならぬ。しかしながらすくなくとも形式上ブルジョア的な立憲体制がとられるかぎり、やがて国会の多数をブルジョア政党が占めるようになり、政党内閣が出

現するに至るのは当然である。しかも明治期にはこの当然の憲政のルールがいまだ確実に履行されることなく、常に天皇の任命による、文武官僚内閣が組織され、明治三十二年の憲政党隈板内閣以降は、わずかに官僚の政党への天降りと、数次の官僚 \parallel 政党抱合内閣が成立したのみであった。大正七年、独占資本主義確立とともにようやく純粋な政党内閣が成立し、階級的内容においては地主 \parallel ブルジョア的であることからより多くブルジョア \parallel 地主的なものに変化して、以後昭和七年まで十数年の政党内閣時代がつづいたのであるが、この場合も、欽定憲法にもとづいて国家権力の中枢は君主の超越的大権が把握するところであり、また内閣首班の任命も宮廷勢力たる黒幕的元老の上奏に俟っておこなわれるという形式が強行されることによって、あくまで自由な憲政の実施が阻止されたのである。それ故、天皇制が危機に達した昭和五年以降、政党内閣制はきわめて簡単に瓦解させられ、やがて容易に天皇制機構の一構成要素たる軍部の独裁体制が構築されてゆくという事態を生ずることともなったのである。

このように、資本主義の進化とブルジョアジーの社会的勢力の強化ともかかわらず、天皇制の、封建的本質にもとづく絶対君主制としての超越的専制大権はあくまでつらぬきとおされた。ブルジョアジーの社会的経済的な支配勢力は、この国家機構の形態を変化せしめ、それによってみずからの勢力をこの権力の内部へ反映させ、天皇の国家の政策にブルジョア的色彩を加えた